

タイトル

狼医者は巻き込まれる

あらすじ

主人公・ルーピンは医者であり、見た目は狼が二足歩行している様なものだった。人外と差別を受けるのを避けるため、ルーピンは森の中に診療所兼家を構えていた。そこでは人間や人外問わずに助けを求める人を治療していた。そんな中、数少ない娯楽である酒を買いに行こうと身支度をした所、家の近くで行き倒れている少女・フィルを見つける。フィルを狙い来た人攫いの一団を追い払えば、フィルの治療を施す。だが、人に擬態するためにつけていた仮面を外している所を見られ、一時は慌てるものの、フィルと親交を深める。守ると宣言した夜、再び人攫いの一団に襲われる。不意打ちに抵抗するも、フィルが人質に取られていることに気を取られ追い詰められる。だが毒ガスが蔓延していると恐怖を煽るようにハツタリを効かせれば、再び人攫いを追い払うことが出来た。

命からがら逃げ出せたのに、やっと此処までこれたのに。森の中を駆け抜け見つけた小屋へと行くも、数日間何も食べておらず、そして体力の限界が来たのか扉へと入ることが出来なかった。誰かいることを期待していたが、中々誰も出る気配がなく、木々が揺れるのをただ眺めていた。

私は、此処で死ぬのだろうか。

そんな漠然としながらも、徐々に近づいてくる死を感じている時、突然扉が開いた。年甲斐もなくビクツと体を跳ねさせ驚くが、外開きの扉が死角になって誰が開けたのか分からない。だが、覗き込むようにこちらへと顔を出した人を見て、私は息が止まってしまった。長いカラスのくちばしのような仮面の目元に大きな黒色の丸いガラス……？が埋め込まれている。姿全体は黒一色で包み込まれており、ほんの少しふくよかな体型に見える。だけど、私はこの姿を見た時、つい死神が化けて出たのだと思ったのだった。

この国では代々続く王族が統治しており、長い歴史を持つ国として他国に強い影響を与えていた。肥沃な土壌と広大な土地では農作物や薬草の栽培等が盛んであり、他国ではこの国の物は高級品として扱われると聞いたことがある。だが、それ並みに盛んなのは魔法関係の物だ。

最も魔法使いを擁している国と言われていることもあり、それを

育成する所もあり、や住人の百人に一人は魔法使いだという噂も聞いたことがある。そのためか魔法関係の道具が発展しており、疲れを知らない馬が引く馬車や無限に湧き出る水源、遠い人と連絡が取れる場所など、相応に便利な生活を送っていた。

……と言っても、それを当たり前前に享受できるのはきちんとした都に住む人間だけであり、大半は存在だけ、はたまた見たことがあるだけの程度だ。ちよつと離れた所にある小さな村や、人外と呼ばれる人たちは存在すら知らないという可能性もある。

その中で言えば、俺はまだ物知りの方だろう。街道から離れた森の奥にぼつんと広い土地に立っている診療所が俺の職場であり、家だ。街の喧騒から離れ、静かな森と共にゆったりとした日常を過ごす。まるで老人の隠居のようだったが、俺の場合は隠居というより、安全に過ごす為にこの場所を選んだに過ぎない。それは、特徴がありすぎる俺の見た目のせいだ。

頭頂部に尖った耳が二つに鋭い目。口と鼻全体が飛び出ており、端を持ち上げれば鋭い犬歯が見える。体全体は茶色の体毛に覆われ、尻と腰の付け根からはふさふさの尻尾が生えていた。……二足歩行する狼と言った見た目だ。と言っても、きちんと指は人間のようになんか五本あるし、足の関節も普通の人と変わらない。ちよつと見た目がカッコよくて人より鼻と耳、勘が良いぐらいでそんなに変わらないのに人から外れた見た目をしていてそれで差別を受けていた。まあ、こうして開業してからはそんな差別を受けることもなく至って平和で、あくびが出るほどだった。

森で軽く狩りをしたり、多少耕して自家製野菜を育ててみたり、お酒を楽しんだりと悠々自適に暮らしている。だが今、ちよつとした事件が起こっていた。

「……酒がねえな」

正確には気軽に飲める酒が無いのだ。週末に多少の安酒と共に味の濃い干し肉をちまちま食べ、月を眺めると言うのを楽しみにしていたのだ。ちよつど飲みたい気分だったのに、無いとなつては少々気分が落ちてくる。尻尾が地面のほんの少しひんやりとした感覚を伝えてくる。

今日は我慢するか、と思つても今晚用の干し肉の香辛料の香りが俺を誘う。……まあ、ちよつどそろそろ陽も落ちてきて涼しい時間帯になつているし、ついでに買い出しに出掛けることにしよう。

欲に負け、木の板の階段を鳴らしキッチンへと出れば保存庫の戸を閉める。そして、リビング兼診察室へと出て戸を閉めれば、薬棚の在庫を確認する。風邪薬から素材含め、ここでまとめて管理していた。……よし、きちんと数はそろつているし暫くは買う必要はなさそうだ。鍵を確認し、玄関の横に立てている洋服掛けにかかっている黒いフード付きのコートを羽織る。尻尾を自身の腰へと巻き付け、コートのボタンを止める。そして、同じ様に掛けてあつた手袋を手にはめ具合を確かめる。爪を尖らせていない為、はたから見れば普通の手と変わらない。

そして、この特徴的な顔を隠すのはこの鳥のくちばしを長く伸ばしたような仮面だ。大昔に流行り病があつた際に使われた仮面らし

いが、今となつては格好つけの一種に過ぎない。だが、俺にとつては最も重要なアイテムで有ることには変わりない。顔に取り付け、後ろのベルトを締める。耳の先端をゆるくそのベルトに挟み込めば、フードを被つた。

姿見で自分の姿を確認する。……完全な怪しい人の出来上がりだが、ここまでしないと俺の姿はごまかすことは出来ない。俺や近くの町の人はこの姿に慣れたものだが、最初の頃はめちやくちやに怪しまれ満足な買い物すら出来なかつた。まあ警戒するに越したことは無いため、今の今までこの格好で人なんだと言い張つて暮らし続けていた。

だからこそ、俺は今日も胸を張つて言う。

「今日も普通だな」

自分でこう言い聞かせれば襟元を一度整える。もし変わり者だと自分で言えば、それが実際に態度になつて出てくる為、嘘でもこういったほうが良い。自己暗示つてやつた。

そして、意気揚々と出ようとした所外から異臭がただよつて来る。直接的な表現でいえば、血の臭いだ。玄関を勢いよく開け放つが、そこには誰も居なかつた。だが、開けた戸を隔てた所から、うめき声が聞こえる。

扉の端から声の方を見れば、そこには血まみれになつた人間の少女が家の壁に凭れかかつていた。

髪は白髪で、肩より下ぐらゐまで伸びているが、ぼさぼさとしており手入れがされていない。それと同じ様に服装はみすばらしく灰

がかっており、酷く汚れていた。だが、その汚れの中でも目立つものはやはり血だ。白髪にも、服にも血がべっとりとついていて、幸いなのは、派手に見えるだけで、見た感じでは大怪我を負っているというわけではなさそうだった。

……人間で、みすばらしい服を着て、血で汚れている。明らかに面倒事に巻き込まれているのだらうと容易に行き着く。関わることは無い、見なかったことにするのが一番いい。

結論づけ無視を決め込もうとする。だが、衰弱した少女が俺へと助けを乞うような視線を向けた。本来であれば勝ち気なのだろうと思ふ鋭い目はどうしようもなく弱々しく見えてしまった。

「……この家主か？」

森の木陰から声が聞こえると、四人の男が出てくる。皆一様に影に偲ぶような服装をしており、普通の仕事をしてなさそうだと勘が働く。俺は肩をすくませれば、玄関を締めながら当然のように答える。

「そうだと。 なにか用か？」

答えながら、横目で少女の反応の様子を見る。

逃げようと体を動かしていたようだが、うまく立ち上がることは出来なかったようだ。何処かを痛めているのか痛みに顔を歪めていた

俺はただの一般人として見られているという事実には胸をなでおろす。伊達に数年来人のふりをし続けてきたかいがあった。ただ、見た目が怪しすぎるために、喋っている男以外は腰の短刀に手を添

え続けている様子だったが。

「その少女を探していた。 その身柄を渡して欲しい」

男はそう言って、少女の方へと指先を向ける。指先を向けられた少女は、体を震わせた。ただ首を横に振り続けていた。俺に一言断りを入れたのは、少女の近くに居ると、土地的には俺の側にあるからだろう。あくまで手荒な真似はせず、協力という前提で行動してほしいらしい。俺は後頭部を掻きながら、正直な事を言う。

「いや、身柄と言っても俺はこの子を知らねえし、連れてくなら勝手に連れていけばいいじゃねえか」

見ず知らずの少女を助けるのは、正直面倒だ。助ける義理なんて無いし、面倒事には出来る限り巻き込まれたくない。そんな見えて居る畏にわざわざ突っ込むほど俺は猪突猛進では無いからだ。

俺の発言に、一瞬男たちは目を見合わせていたが、喋っていた男がうなずいてこちらへと距離を詰めていく。抵抗は出来ないだろうし、それこそ呆気もなく連れて行かれるのは容易に想像できた。

そして、男が俺の横を通り過ぎ、少女に掴みかかろうとした所で、男の後ろ襟を掴む。

「なっ」

そして、次の句を言わせる前に足を引っ掛け、体勢を崩せば襟首から手を離し、相手の顔面を掴み後頭部を地面に叩きつけた。

森の僅かなさざめきすらなくなり、張り詰めた弦のような緊張感が漂う。倒した男は不意打ちも相まって完全に伸びており、動く気配は無かった。

弦をわざと逆撫するように、俺は肩を竦ませ、大仰な素振りで情感たつぷりに言う。

「……医者が人が相手に見て見ぬ振りには出来ねえからなあ。ベツトは数が限られてるんで、診る余裕は無いぞ？」

とん、と地面をつま先で軽く叩く。そして、男を引きずれば、他の男達へと近づいていく。ピリついた空気が俺の少し蒸れたマスクの中で肌を刺激する。

太陽が陰り、風が吹く。そして、気絶した男を相手たちの前へ投げおいた。人質を取るという選択肢は俺には無くなった。だが、この場の主導権を握っていたのは俺だ。

「お、俺達が誰だと思って……」

「知るわけ無いだろ、お互い名乗ってねえんだから」

俺は高圧的な態度を維持したまま、もう一步踏み出す。男達はたじろいた様子で、お互いに顔を見合わせ、倒れている男へと視線を向ける。

もし相手に手練が居たのであれば、この態度は逆効果だろう。だが、悠々と姿を見せ、そして素性を知らない相手に不用意に近づき、相手が自分たちの存在を知っている前提で話すこいつらを、俺は三流と判断した。

だが、三流と口にするのは止めた。自覚が無い相手の神経を逆なでするかもしれないからだ。それで激高し三人同時に来られても困る。一通り戦う技能はあるつもりだが、二対一で正面から勝てる自信は今の所無かった。だからこそ、わざわざ俺を強く見せて戦う選

択肢を潰そうとしていた。人質を取らずとも、お前らに勝てるよ。

風の音がこの場を支配し、体から熱をさらって行く。時間的には一瞬なのだろうが、こうやって相対すると非常に長く感じていた。

……ハッターを見抜かれたか？ 腹を括り、左足を踏みしめ腰を少し落とす。だが男達は倒れた男を担ぎ上げ、森の中へと姿を消していった。恨めしそうな視線を俺に向けて。

ゆらりと手を振って見送れば、肺から熱を吐き出す。仮面の中の温度が少し上がり、取りたくなってくる。だが、まだ我慢だ。外すわけには行かない。

自身の首元を揉めば、壁にもたれ掛かったまま意識を失っていた少女を見る。厄介事には慣れているつもりだが、正直面倒だ。だが、人を見捨てるような三流のマネはしたくなかった。

少女の処置を済ませ、ベッドに寝かせている。流石に血と汚れた衣服を着たまま横たえるのは不衛生なため、一度脱がせて自身の服を着せた。だが、サラシが胸元に巻かれており、それを取るか取らないかで俺はだいぶ迷っていたのだが……起きた時に手を出していないと言ったためにそのままにした。耐性が無いわけではないが、面倒事は避けるべきだろう。

そして、相手の体を診た時、分かったことがある。背中にあるむち打ちの跡や、体の何処にもある痣、あげくには骨も折れていたヒ

ビが入っている箇所もあった。

ざっと考えるのであればこうだろう。この少女は奴隷制が無いはずのこの国で奴隷となっていた人間で、殺されそうになって命からがら逃げていた。だが、この国で奴隷を取るのは違法行為であり重罪だ。だからこそ口封じ、又は連れ戻すためにあの男どもが雇われた。

逃走のはて、俺の所へとたどり着き、今へと至る……といった感じだろうか。どうやって俺の元へとたどり着いたのか、何故奴隷となっていたのかと疑問が浮かぶが、こればかりは本人に事情を聞かないと分からない。

リビングの椅子に座りながら、呼吸が安定している少女を見ながら、俺はほんの少しだけ息を荒くしていた。別にその姿を見て興奮していたわけではない。

「……あちい」

俺はあれからずっと仮面を付けていたのだ。そのせいでほんの少し熱中症になりかけていた。いや、多分初期の段階にきている気がしていた。よく思えば、男を追っ払ったときから水分補給をしていないように思える。頭がくらくらついてほんの少し痛む。

しかし、取るわけにはいかない。あの少女が奴隷で俺の所に着た人だろうとも、この姿を知られるわけには行かない。人外と人間の間には深い溝があり、もし俺が人外だと知られ、そして誰かにバラされてしまったとすれば、不利益を被るのは俺だ。

あくまで俺は人外であり、彼らと同じ立場に立つべきではないと

言われる化け物だ。わざわざこんな辺鄙な所に居を構えているのも、こんな格好で人と接するのも、全ては線引のためであり、安全のためでもあり、双方のためでもあるのだ。

だが、それが分かっているもキツイ。風がある外ならまだしも室内で付け続けるのは大変だ。一度キッチンの方へ行って仮面を取って目一杯空気を吸いたいところだが、急に容態が変わった時に対応できなくなる。安定しているのだからビビらなくても良いのだが、こういう時ほど警戒することに越したことはない。

……少しぐらい、此处で取っても大丈夫だろう。そんな悪魔のささやきが鈍った頭の中に響く。どちらにせよすぐ起きることはない、数呼吸ぐらい大丈夫だ。背を向けて、仮面を置けばいい。

そんな理由を自分の中に作り上げれば、フードを取った。籠もっていた熱が、まるで湯気のように頭から浮かび上がり、想像しながら、仮面のベルトを緩める。挟んでいた耳が勝手に立ち上がり、僅かな痛みを発している。軽く揉みながら仮面を取り去り、目一杯空気を吸い込んだ。自分の吐く息混じりではない、慣れ親しんだ部屋の空気を味わいながら、ゆっくりと息を吐き出した。

「……えっ、狼だったの？」

胸元を少し緩め、二呼吸目をしようとした瞬間、何者かの声が聞こえ息が止まった。この部屋で声を発せられるのは俺と、もう一人しか居ない。

古びたドアを開けるような動きをしながら、もう一人がいる方へと視線を向ける。もし俺が人間の顔であれば、冷や汗をたっぷりと

かいている事だろう。いや、今も正直言えばかいているのだが、あまり目立っていないはずだ。

視線の先では、ベッドから起き上がっている少女の姿があった。少しつり上がっている目元は本人の体力が回復したおかげか鋭さを持っており、勝ち気な印象を与えた。血に汚れた髪を軽く撫でながら俺の姿を見る少女は、確かに驚いていたが怖がっている様子はなかった。どちらかといえば物珍しいといった様子だろう。

だが、俺の脳内はそれどころでは無かった。自分の人外の姿を人間に見せるという一番避けたかった事が起こったのだ。口を半開きにしながら、対応策を高速で頭の中に組み立てる。

口封じに殺すか、なけなしの金を渡すか、起きたのだから外に放りだ……いや、これでは逆効果だ。説得するか？ いやでも応じた所で相手にメリットが無い。やはり殺すしか……。

なんて、凶行手段を取るという結論に至りかけるが、それをする勇気は無かった。助けたのに殺してしまつては本末転倒だ。考えに考えついた一つの対応策。それは、誤魔化すことだった。

「……いや、これは今君がみている夢だ」

「夢？」

「そう夢。怖い事があつたから狼が出てきているんだ」

唸るような声を出し、本職の狼も驚きそうな程のクオリティの鳴き声を披露する。それをみた少女は呆気に取られていた様子だったが、すぐにクスクスと笑い始める。ひとしきり笑い終えた後、俺の顔を見れば勝ち気な笑みを浮かべた。

「子供でも分かるような嘘を言うなんて、茶目つ気があるね？」

「……や、結構な自信作だったんだが」

相手の笑みとは反対に、俺は多分顔が引きつっていたように思う。相手の言う通りだ。子供でも分かるような嘘をなんで口にしたのだろうか、今更ながら後悔する。他にも言いようがあったのに、何故夢にしたんだ。いや、根本的な所で言えば、もう少し警戒しながら仮面を取るべきだった。数分前の自分を蹴りたい。

そんな俺の様子を見たのか、少女はフォローの言葉を口にしてくれる。

「そんなに心配しなくても、命の恩人を売るような真似はしないつて」

その言葉で安心しかけるが、相手が何を考えているかわからない。義理堅く見せて、弱みにつけ込むつもりかもしれない。それが視線に乗っていたのか相手がバツの悪そうな表情を浮かべる

「そんな目しなくても本当だって。……まあ助けてもらった手前、条件一つつけるけど」

「……金か？」

「出来れば欲しいけど今は違うかな」

じゃあ何だ、と尋ねようとした瞬間、いびきにも似た音が部屋に鳴り響く。俺ではない。昼食は済ませてあるからだ。となれば一人しかない。恥ずかしそうにお腹を抑え、頬を赤らめれば俺のことを見てくる。

流星にそれを尋ねるほど、野暮ではなかった。ただ俺は立ち上が

れば、少女に向かって一つ質問をした。

「何日食べてない」

「……三日」

その日数を鑑みて、ある程度のレシピを頭の中に思いかべれば、「じゃあ、胃に優しいものにするか」と言い、俺はキッチンの戸を開けた。

俺の予想に反して、この少女……ファイルは驚くほどに元気が良かった。俺が作った料理も平らげ、満足そうな笑みを浮かべていた。出来ればゆっくり食べてほしかったのだが、飢えていたのだから仕方がないとも言える。

「ごちそうさま、美味しかった！ 料理上手いんだねえ……えーと」

「ルーピンだ。一人暮らしたから必然的に伸びるんだよ」

へえ、と皿をベッドの横のちよつとしたミニテーブル上に置けば、部屋中をせわしなく見渡していた。そんな様子を見て、料理が美味しいと言ってくれた嬉しさ反面、少し心配というか気になったことを尋ねた。

「……なあ、ファイル。お前よく人外が作った料理食べるよな？」

実際、この国に深く根付いている差別意識から考えれば、ファイルのような存在はある意味異質だった。俺だっけしばらく此処で色んな人を診て来たが、人外はともかくとして人間は多少なりとも嫌悪

感を持つ人が多かった。

俺は人外と公言していないし全力で隠しているが、それでも分かる人は分かる。そんな人達は大抵、多少なりとも嫌悪感があったのだ。どれだけ切羽詰まっていようと、根付いた意識というのは簡単に剥がれるものではない。だからこそ不思議だった。そんな様子を見せず、ずっと美味しそうに食べていたファイルの姿が。

そんな俺の疑問に、ファイルは多少ぎこちない動きになりながらも腕を組み、言葉を考える。暫く無言の時間が続き、そして出た答えは。

「お腹がすごく空いているのに、美味しい匂いするもの出されたら食べてしまうでしょ？」

と答えにならない答えだった。確かに飢えている時に美味しそうなものを出されてしまえば俺だって食べてしまいかもしれないが、そういう事を聞きたかったわけではない。俺もつい腕を組み、頭を捻って考え込んでしまう。どう聞けば良いのか、少し判断が付きにくい。

「んん……例えば、俺がその食べ物の中に仕込んでる可能性だってあるんじゃないのか？ それを迷いなく食べるのはちよつと危ないと思うんだが……」

「それはないよ、ルーピンさん」

俺のたとえ話に、ほぼ即答でファイルが答える。それに少し呆気にとられるが、その即答の理由が知りたくなって尋ねた。だが、その答えは至極単純な物だった。

「だって、私を助けてくれたんだもの」

「……それだけ？」

「他に理由作り上げて欲しいなら作るけど」

俺を見たフィルの目は真っ直ぐで、ほんの少し眩かった。その視線から逃れる様に頬を掻き、視線を上向きにそらせば、唸り声を上げる。この言葉にどう返答すれば良いのかと悩んでいると、フィルの方から質問が飛んできた。

「ルーピンは何でわざわざ危険を犯して人を治しているの？ 私のことだってあいつらに渡せば危険を犯さずに済んだのに」

その質問は、俺がずっと考えながらも、答えが未だに形容できないものだった。そうだ、よく考えれば、俺がやっているのはリスクが大きいだけで俺に対するメリットは少ない。なのに、色んな人を受け入れ、そして治療を施す。それこそ、人間に対して義理は無いのだから。けど、それをしないのは……。

「……少し、かっこ悪いからな」

「かっこ悪い？」

「ああ、助けを求める人がいるのに何で手を差し伸べないのか、ってな」

そこから、俺はほんの少しだけ過去を話した。十数年前の時のある事件の時、俺は親を亡くし、宛もなく彷徨っていた事。その時に助けてくれたのが、医療の技術を教え、この家を与えた親代わりの師匠のこと。その師匠が言っていた言葉。

「生きている限り誰かを救わなければならない、それで不利益を被

ろうとも。俺は、その言葉に従って行動をしているだけだ。実際、俺だってあまり人間は好きじゃない。だけど、困っているのなら手を差し伸べるべき……と俺は思っている。」

顔を上げると、俺の話をフィルは黙って聞いていた。外はすっかりと暗くなっており、テーブルの上に置いたランタンの火がゆらりと揺れていた。フィルの横顔は、明かりで陰っており、その表情の真意を伺うことは出来ない。俺は立ち上がると、そのフィルの頭へと手を触れる。一瞬、怯えた様子で体を震わせ、俺の方を不安げに見つめる。

どんな顔をしているか分からないし、もしかすれば光の加減で恐ろしく見えるかもしれない。だが、それでもその不安を拭い去るように頭を撫でれば、出来る限りの笑みを浮かべた。

「大丈夫、俺が守ってやる」

そう言うと、一瞬フィルは驚いた様子だったが、ぼたり、と涙をシートの上で落とす。頬を流れる涙はランプの光で温かく輝いていた。十代近くに見えるとはいえ、怖い思いをし、痛い思いをしてきた。むしろ、アレだけ明るく振る舞えるほうがおかしかったのだ。嗚咽を漏らし、膝を抱えるフィルの頭をゆっくりと、不安を掬い取る様に撫で続けた。

あれから泣き疲れたのかフィルは寝息を立てていた。皿を下げよ

うとした時、いつの間にか服の裾を掴んでいたらしく、気付かせずに離すのに手間取ってしまった。

……しかし、話を聞きそびれてしまったな。

一体ファイルは何から逃げ追われているのか。何故あれだけ傷跡が多かったのか。そもそも奴隷として本当に扱われていたのか。

聞きたいことは山程あるが、いま現状それを聞けるほどの体力は残っていない。むしろ、あの時起き上がってご飯を食べれた事自体がとんでもないことなのだ。

「……明日だな、少なくとも」

そう思えば、洗い終えた皿を布で拭き棚の中へ仕舞い込む。今夜は一応見張っておくか。そう思い、キッチンの戸を開けようとした瞬間、匂いに違和感を感じる。

俺と、ファイル以外の匂いが微かにした。男特有のツンとした汗の匂いだ。……嫌な予感がする。いや、ほとんど確信めいたものだ。一応キッチンから外へ続く扉を見て、心配がないことを確認する。そして、ランプの明かりを落とし、数歩下がれば目を閉じる。そして、目を閉じたまま助走を付け、勢いを乗せたまま蹴り開けた。

勢いを付けたまま地面をスライドするようにしゃがみ込めば、頭上を何かの棒が勢いよく通り抜ける。目を開けば、一足先に慣らした闇の中で動く影を視認した。棒を振り抜いた影の足元を滑らすように手を軸にして蹴り抜く。

「つて!？」

足を取られ、倒れ込んだ影は床にしたたかに体を打ちつけ、痛み

に声を上げる。俺は立ち上がり、声をあげた部分をボールを蹴るように足を振り抜けば、足の痛みとともに影が壁に激突した。僅かな明かりが揺れるキッチンのランプは、男の足がピクピクと震えているのを照らしていた。そして、あたりを見渡せば、同じ様な影が二つあることを確認する。

「やれ!」

その声と共に影が二つ動き始める。慣れ始めた目は、男二人の姿を視認し、手元には棍棒が握られていた。

「二体一は嫌だな……!!」

闇の中で棍棒の軌道を読むのは正直言って難しい。二人なら尚更で、現に別々の軌道を伴って俺を狙っていた。少し下がり椅子へ足をかければ、跳躍する。風を切る音と共に、ガラスと木が砕かれる音が部屋に響く。背を翻すように二人を越えれば、膝と手で着地の衝撃を和らげる。そして、しゃがんだ状態から振り向いた男の片割れの顎を蹴り上げた。男がよろけテーブルに倒れ込むも、男はもう一人いる。そいつに対応しようと立ち上がり、蹴りを放とうとした時、後ろから「ルーピン!」という声が聞こえた。

まさか、と後ろを振り向き反応が遅れた瞬間、棍棒が俺の体を捕らえる。ピシツというヒビが入るような幻聴と、内臓が纏めて潰されませこぜになったような気持ち悪さ、そして重く響くような痛みが一度に襲いかかり、床を転がり倒れた。

「()……が……」

「手間取らせやがって。あの時素直に渡してればこんなことには

ならなかったのにな？」

男の声には聞き覚えがあった。あの時地面に張り倒した男だ。：つまり、こいつらはあの時の三流共か。

「はっ……逃げたのに、今度は不法侵入か？ やっぱ三流は、ちげえな……！」

滲む視界と吐き気と痛みに苦しみながら、悪態を付く。そして、闇に慣れきった目でその男を見れば、一番懸念していたことが形になっていたことに気付いた。

「はな……せ！」

フィルが、男の手によって捕らえられていた。後ろ手に縛られているらしく、男に対して抵抗しているが逃げられそうな様子はない。男は倒れこんだ俺を見ながら、ニマニマと気持ちの悪い笑みを浮かべている。

多分あそこから逃げ切ることは無理だろう。本人自体の体力もないし、明らかな体格差もある。だからこそ、俺が助けに行くべきなのだろうが、さっきの一撃が効いていた。口の中に鉄の味がする。立ち上がるのが億劫だ。だけど、このまま見過ごすわけにはいかない。

床に両手をつき、痛みにあえぎながら立ち上がろうとするが、横の男に地面に蹴り倒される。ベッドの足に背中からぶつかり、派手な音を立てた。幸いなのはさっきの一撃で少し痛覚がマヒしているようでそこまで痛みを感じなかったことだ。

「無様だな？ どうだよ、三流にやられる気分は」

部下にフィルを預け、俺の顔をじろじろと見る。そして、嘲笑を浮

かべれば顔に向けて唾を吐いた。べっとり毛並みに張り付く気持ちの悪い感触と共に鼻を鳴らせば、男から笑い声が漏れる。

「依頼主からは“人間”は殺すなと言われたが、人外は殺すなどは言われてねえから……出来れば女のほうがいいが、腹いせさせてもらおうか」

わざわざ見せつけるようにゆっくりとナイフを抜けば、俺の目の前に突き刺した。その光景を見た瞬間、俺はつい吹き出してしまった。吹き出した時、男の顔から笑みが消える。

「……何がおかしい」

「……いや、やっぱお前らは三流だなど思ってたんだよ」

腹と胸が笑う度に痛むが、これほどおかしき事はない。男の顔が一気に憤怒に染まり、俺の肩へとナイフを突き刺す。異物が入る感触と共に、鈍器とはまた違った激痛が走るが、それでも笑うのを止めない。

フィルが俺のことを何処かぶっ壊れたと思っており、表情が曇り始めるが流石にそれは早計だ。というか、こんなことで壊れてどうするんだと言いたいが、まず先に言うことがあった。

「……変な匂い、するだろう？」

鼻を鳴らせば、呼吸を落ち着ける。部屋には僅かな刺激臭が漂っており、男達も今気づいたと言わんばかりに鼻を押さえる。

「この匂いが、何だって？」

「お前ら、俺の薬棚ぶっ壊しただろ。……そこにな、人体に有毒な透明な煙が作れる劇薬を入れてたんだよ」

俺のカミングアウトに、男どもは明らかに動揺した様子だった。だが、まだそこまで慌てている様子はない。信用していないと言うように鼻で笑えば、ナイフを握り更に傷口をねじ込んでくる。

「ぐっ、が……！」

「どうせ部下にも使ったハツタリだろう？ そんなもん信じねえよ」その言動に俺は再び吹き出す。吹き出したせいで肩が痛い、そんな事に構ってる暇はない。わざとのんびりと空いている手を仰いで鼻を鳴らす。

「……どうだろうな？ 俺は倒れ込んでたし、ファイルは身長が少し小さめだからまだ吸ってないんだ。だが、お前らはどうだ？ ずっと、立ってただろ？」

男の手が止まり、ファイルを抑えている男も明らかに動揺を隠せないようだった。そこへ、俺はもう一步言葉を重ねる。その一度ついた疑念と不安を更に大きくするように、薪をくべていく。

「お前ら人間は鼻が利かないからなあ……俺に言われてやっと気付いたんだろ？ 結構な量吸ったんじゃないかねえのか？」

たじろぐ男を見据えながら笑みを釣り上げ、さも楽しげに大きく笑う。そして、指を一本一本立て、物を数えるように言葉を続ける。「そうだそうだ、その毒ガスは吐き気がするし、まるで喉の中が火傷した様な症状が出るんだ。……後数分か？ そろそろ症状が出る頃かもしれないな？」

にたり、と笑みを釣り上げる。ファイルが一瞬悲鳴をあげたが、俺は気にしない。気にする余裕が無い。男どもの顔が青くなり、ファイルを

捕らえている男が咳をしてしまう。そこへすかさず指を指し「初期症状だな？ 早くしないと死ぬぞ？」と追い打ちを掛ける。

「ほら、行け！ 今なら魔法使いに直してもらえば間に合うんだ！ 仲間を連れてとつと行け！」

大声で叫ぶようにいえば、男どもは弾かれたようにこの場を逃げ出した。伸びてる男共を引きずっていきながら。ファイルはどうやら置いていかれたらしく、地面にへたり込んでいた。そりやそうだ。緊急時には任務より自分の命のほうが最優先に決まっている。……まあ、そこを任務優先にしきれないのが、三流の証なのだが。

ファイルが、俺の顔を見る。その表情はだいぶ色んな感情を混ぜこざになったような、何とも言い難いものだったが、一番比率が高い感情は、“申し訳無さ”と“安堵”だろう。

その表情に、親指を立てて返せば、肩を抑えたまま床へ倒れ込む。窓からは明かりが差し込んでおり、ほんの少し眩しかった。そんな俺に近づき、ファイルは横に座る。

暫く無言で窓を眺めていたが、徐に俺に質問をした。

「ねえ、ルーピン」

「何だ？」

「……毒の煙あるなら、私不味くない？」

顔だけファイルに向けると、不安そうな表情を浮かべていた。確かに身長が低いとはいえ、多少なりとも煙を吸っている可能性はあり、その場合であれば死のカウントダウンは始まっていることになる。不安になるのも無理は無いが、その光景が俺は酷く面白いものに見

えて、笑ってしまった。ファイルは笑い始めた俺を見て、明らかに非難するような視線を向けていたが、笑っているのを見て何かを思い出したようだ。そして、ジト目で俺を見れば、ため息交じりに言った。

「……もしかして、さっきの全部嘘？」

「全部じゃないが、嘘はついた」

薬棚に毒の煙が作れる素材が置いてあったのは本当だ。だが、簡単に作ることが出来てしまつては流石に俺の身が危険なため、置いてあったのは希釈した物だった。だからこそ、匂いを指摘するまで男達が気付いていなかったのだ。原液であれば、割れた時点でもう大事になっているに違いない。

症例も本当であり、もしその素材を使って作っていたのであれば、確かに今さっきの症状が出てくる。だが、それであれば吸い始めた瞬間から出てくるものであり、そんな数分後から始まるみたいな物ではない。

後の所はもうその場のノリとでっち上げにでっち上げを重ねて、不安を全力で煽ることに注力していたのだ。

「……正直唾かけられた時に匂いに気付いたんだけどな。いやあ、鼻が利いて良かった」

「……嘘つきね、ルーピンは」

「ハッターリと言ってほしいな」

「変わらないでしょ」

ファイルは明らかに怒っている様子だったが、ため息を吐き出せば、仕方なさそうに目尻を下げた。そして、俺に笑いかける。それは、朝

焼けに照らされ、ほのかな温かみを持った柔らかな笑みだった。

「まあ、俺が守ってやるって言葉は嘘じゃなかったし、嘘つきとはまた違うのかもね」

続く